

はじめに

本報告書は、平成 23 年度に取り組んだ千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト「社会とつながる教員養成に関する実践的研究」(研究代表者：藤川大祐 千葉大学教育学部教授)の成果をまとめたものである。

教員養成教育にかかわる議論では、現場経験のある教員による指導を充実させたり、教育実習等の学校現場での体験を増やしたりと、学生を学校文化に親しませようという方向での改革が議論されがちである。もちろん、教師となった者が学校現場に不適應を起こすことを防ぐためには、こうした方向での改革が議論されることは理解できる。

しかしながら、学校が学校外の社会と隔絶してしまい、「学校の常識は世間の非常識」などと揶揄されることが多いことにも注意が必要である。教員養成教育を学ぶ学生たちの中には、学校外の社会にあまり接することがないまま教師になることに不安を抱く者が見られる。いったん民間企業につとめて数年後に教師になりたいと言う者さえいる。

また、高度情報化、国際化、少子高齢化等、日本の社会の状況が急速に変化する中で、学校教育だけが変化の影響を受けないということはあるまい。学校教育に急激な変化は望ましくないとともに、徐々に教育の内容や方法、さらには学校のあり方も変わることは不可避である。

私たちはこうした問題意識のもと、本プロジェクトでは、実践的な取り組みを通して「社会とつながる教員養成」の可能性を探ることとした。

「社会とつながる教員養成」と一言で述べても、具体的にはいくつかの種類の取り組みが可能である。

第一に、大学の教員養成課程の授業において、新聞記者をゲストとして招き、メディアの側から学校がどのように見えるかについて実験的な授業を行った。学校を取材する側の視点にふれることは、学校文化を相対化し、今後の学校のあり方を考えるために重要なことだと考えられる。

第二に、千葉大学教育学部附属中学校の選択授業として、「社会とつながる数学」「社会を読み解く数学」という一連の授業を、教員と学生とが共同で開発し、実施した。時代の変化に対応した教科教育のあり方を探り、実際に授業を行う経験をすることが、将来の教育実践を担う学生には重要な経験となるであろう。

第三に、学生が多様な人々とともに学ぶ「越境型カンファレンス」をデザインし、実施している。この取り組みは、今後、教員や教員養成課程の学生が多様な人々とともに学ぶ場のモデルとなることが期待される。

次代の学校は、呼吸をして代謝するように、学校外の社会とかわりながら柔軟に変化できるものであってほしい。本研究は、そうした学校を将来担う教員の育成に向けた私たちの問題提起である。

千葉大学教育学部教授
藤川 大祐

